

グッドルーザー球磨川
～鳥籠学園でのノーハ
ウなノウハウ～

TESTSET

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

球磨川くんをオリジナル学園に放り込んだだけ。

目次

新・もしくははリメイク

新話『ノーハウなノウハウ その①』

1

新話『ノーハウなノウハウ その②』

10

新・もしくはハリメイク

新一話『ノーハウなノウハウ その①』

001

『笑えよ——人の冗談だぞ』

背中から体内を渡り胸部に突き出た螺旋状のモノを見ながら、「なんで」とか、「どうして」とかいう、実にくだらない取り留めのない思考が脳内に入り巡っていた。こんなんじゃないあ、僕の慎ましめな胸も、もはや無いに等しいだろう。同じく痛みも、もはや感じない。

それもこれも、全て、目の前の転校生のせいだ。

僕は、何一つ、悪く、ない、はず、なのに——。

『——僕は悪くない』

そう言う転校生に、僕は睨みを利かせることしかできなかつた——いや、効いてすらいなかつたか。

あいつは、始めから、人の話なんて——

002

あいつは転校生だ。

僕の大方向風満帆な人生計画に於いて、突如現れた『異端』イレギュラー、『異常』アブノーマルと言い換えて良いのかも知れない——いや、そう呼ぶのすら烏滸がましい。存在が、許されない。許したく、ない。

当の本人は、一番後ろの窓際席——僕の隣に当たる席にて、学園内だというのに週刊少年ジャンプを堂々と読み耽っている。言い忘れていたが、授業中である。あんな大きな雑誌は教科書で挟んでもバレバレだろうに。

だというのに、先生はなんのアクションも起こさない——致し方ない、というものでろう。大人だって、誰だって、彼には絶対に関わりたくない。

生徒ならば尚更嫌だろう。僕は嫌だ。隣席というだけで吐き気がする。学園にも来たくない。

それがまかり通らないというのが、学生という身分の辛いところだ。人生が、めっちゃくちゃになってしまふ。

『でもきつと、君の人生は薔薇色だぜ——語り手ちゃん』

「……………えっ?」

いきなり話しかけられて、とてもびつくりした。とてもとても。

いや、びつくりなんて生ぬるい言い草で良いのかは判らないが——けれど事実だつ

た、その唐突な出来事は、覆りようのない理不尽な真実だった。

ああ、めちやくちやだ。ただでさえ隣席だというのに、喋りかけられるなんて。

「……………」

『おいおい、無視は良くないなあ。一丁前にモノログ綴る暇が有ったら構ってくれよ』

「……………えーつと、なにかな——球磨川くん」

…………名前を呼ぶことすら苦痛な相手なんて、本当にいるのか。知りたくなかったな。

『いや？　なんとなく、ただなんとなく話しかけたただけだけど。授業中だぜ？　私

語は慎めよ』

「……………」

こいつ。なんなんだ、こいつ。

…………やめよう。怒りを頭にしている事なんか有りはしない。落ち着こう。クールにだ。

そもそも相手は“球磨川”だ。マトモに取り合ってはいけない。だからといってクレイジーにもなってはいけない。

…………どこまでも、嫌なやつだなあ。ただ話すだけで、話しかけられただけで、僕個人の内面まで侵食して、白濁して、剥奪してこようとするなんて——まったく、本当に嫌なやつだ。

彼は何も感じない様子でジャンプを読み続けている。もはや面倒くさくなったのか、教科書で挟んではいない。何が恨めしいのか、藁人形よろしく教科書は机に打ち付けられていた。……螺子で。

どこからあんな螺子を取り出して、しかもどうやって打ち付けたのだろう——いや、考えるだけ無駄だ。やめておこう。

『あつそうだ。語り手ちゃん』

……最悪だ。また話しかけられた。そもそも私語は慎まなくっちゃいけないんじゃないのか？ ……嘘、か。

「……なにか、用があるのかな？」

『あのね、ちよつとだけ、本当にちよつとだけ教えてほしいんだ』

彼はもつたいぶるように言う。

『ちよつとだけ——聞きたいんだよ、この学園の“守護者”』

002

別に、彼の言葉は体言止めで終わったわけじゃあない——いや、終わったのだけれども。

正確には、“終わらざるを得なかった”と言うのが正しいところだ。

なぜ、彼はその先の言葉を綴ることができなかったのか。それは——

——彼の頭部が潰れ絶命したから。

死人に口なし——もはや頭もない。

悪い冗談も、ここまで来ると傑作だ。

教室には今現在、僕と——この愉快な惨劇を演出した張本人——つまじょうじつめ対馬小路爪つめさんが、立ち尽くしているだけである。

「——はは……はつ。ははは、は………」

乾いて渴いた、そんな笑いをする。『対馬小路爪さん』——人一人殺しているんだ。相手が球磨川くんだとはいえ、相手が球磨川くんだからこそ——彼女は、焦っている。

彼女のスキル——『フオールダウンフオール動々』。物事を『重く』して、『フールド圧迫』して、『押し通す』——

——そんなスキルだ。

少なくとも、『人を殺すためにあるスキル』では、まったくもってない。ただの、本当にただの、ちよつと便利なスキル“能力”にすぎない。そのはずだったが——現に、死んだ。球磨川くんが、死んだのだ。

球磨川くんの頭が潰れ消えて、無限とも思えるほんの数秒を置いてから、教室にいた『ほとんどすべて』の人たちは逃げ出した。対馬小路さんを置いて——彼女は、人殺し“というおぞましい重圧を、一人で耐えなくてはならなかったのだ。

……まあ、僕も残っているのだが。

「……………教楽来ちゃん——どうしよ、これ…………」

「……………」

僕は答えない。答えることができない。質問にも、期待にも。

……………

「あたしはさ、あたしはたださ——」

彼女の言葉は歪だった。何を言うにも、何を言おうにも、詰まって詰まって詰まって
——苦しそうに、辛そうに、言う。

「ちよつとだけ、本当にちよつとだけ重くして、ちよつと脅してやろうつて……………ただそれ
だけで——」

「——落ち着いて」

落ち着いてください。そう続けるはずだった。そう言おうとした僕の声は——
「まっくろ」に遮られた。

『まったく——酷いじゃあないか、痛かったぜ。ほんとにさ』

ぬめり——と、*「彼」*は起き上がった。

*「球磨川禊」*は、起き上がった。

生きて——いる。

そこに——いる。

死んだはずなのに——

「——なんで……」

その声が、僕から出たものなのか対馬小路さんから出たものなのか分からなかった。理解不能だった。ただ、ただ、理解不能だった。

死んだはずの「球磨川禊」がなぜ生きているのか——思考が停止する。彼の瘴氣マユナシに当てられて、思考が破壊こわされる。破壊こわされる。壊滅こわされる。喪失こわされる。消失こわされる。

——こわされる。

『殺やるならもつと、確実に殺やらないと——復讐が帰ってくるからね。お得ではあるけれど、実戦向きじゃあないよ』

分らない。何を言っているんだこいつは？ 死人が喋るなよ、何なんだ？ 解らない、判らない、きもちわるい。

——まて、落ち着け。落ち着くんた、僕。落ち着け。

冷静になれ、彼はスキルホルダーなんだろう。きつと死んでいなくて、幻覚とか、たぶんそんな感じの何かでだまくらかしていただけだ。焦ることはない。取り乱すことはない。

死んだ人間が、生き返ることなんか、絶対に、ありえないんだから。

「球磨川——くん」あくまで冷静を装って、球磨川くんに話しかける。「いったい——な

にを……?」

『あはは、そんなに震えた声出してどうしたんだい——というか、むしろ僕から“なにを?”って、質問したいところなんだけれど』

「……………」

『ま、大方予想はついてるんだけどね』と続けて、から球磨川くんは対馬小路さんを一瞥する。『空いた口も塞がらないって顔だね。可愛いお顔が台無しだぜ』

球磨川くんにつられた僕も対馬小路さんの方を見た。球磨川くんに指摘されたからか、口は閉ざされていたものの、その驚愕と畏怖の表情はそう簡単に消えるものじゃない。恐怖の余韻はその表情に強く焼き付いていた。

真つ青な顔。信じられないものを見るような目。冷や汗が頬を伝い床に垂れたことにも対馬小路さんは気付いていない。どこにも『人殺しにならなくて済んだ』とか、そんなプラスでポジティブな感情を一切持ち合わせていない、酷い、顔だった。

駄目だ——完全に球磨川くんに飲まれてしまっている。まずい。

こうなったら——

「お——おまえ……なにが……どうなつ——」

——混乱しきつた対馬小路さんの、実に無警戒な襟首を掴み、僕は教室を飛び出した。

『あつちよつ——』

球磨川くんの声が聞こえるが、気にしない。無視をする。

逃げる。逃げれば何もかも解決する。逃げればいい。逃げれば、あとに繋がる。

「すみません、対馬小路さん。今は慮おもんばかつてる余裕なんかないんです——逃げないと、今すぐに」

「ぐあつ——くる……しい……!」

よし、こんなに元気があるなら大丈夫だろう。逃げ切る頃には大人しくなってくれてるはずだ。

「飛ばしますよ——対馬小路さん!」

「がっ! あががが、ががあつ!」

新一話『ノーハウなノウハウ その②』

003

教室を飛び出した僕は、急ぎに急いで三年二組の教室に飛び込んだ。無駄に入り組んだこの校舎は、たった二組違いだという教室も、迷路を抜けなくては這入ることもできない。同じ学年だというのに階段を五回くらいは登り降りした気がする。増築に増築を重ねた結果がこれらしいが、今はあまり関係の無い話だろう。

閑話休題——三年二組の教室には、まだ授業中だというのに、たった一人しか居なかった。

「——こんにちは、教楽来ちゃん。待ってたよ」

と、声を掛けられる。しかし、正直なところ、とてもじゃないが今は反応できるような状況ではなかった。さっきまでの対馬小路さんを引き摺つての全力疾走で、息も絶え絶えだった。

反応が無いことを少し訝しみ、そして僕が声も挙げられない状況だということに気付くと、肩を激しく上下させている僕の方へ近づいて来る。

そして、僕の肩に触れた。

その瞬間——疲れはゼロになった。

ようやくまともにも口が利けると、僕は口を開いた。

「……………こんにちは——玖珠理子さん」

僕がSOSを出した相手——それが、この三年二組に君臨する止まった悪魔・玖珠理子さんだった。

悪魔のような性格で、悪魔のような形態で、悪魔のような能力を持っている——最低最悪、だから、止まった悪魔。

自身のスキルの影響で、成長が止まっている——止まらざるを得なくなっている、だから、止まった悪魔。

「相変わらず……………デタラメに凄いですね、あなたのスキル……………」

「それはそこで伸びてる教楽来ちゃんこのボスにも言えるでしょ」

「え？」

伸びてる？ と、僕がここまで引き摺ってきた対馬小路さんの方向を見ると、対馬小

路さんが目を回して倒れ伏していた。

……………少しやりすぎちゃったかな。

「んま、あたしのスキルのが性能も使い勝手も勝ってるし優ってるけどね。その子より

も、あたしのが格上」

上を指差すジェスチャーで、格上だとアピールする玖珠さん。圧倒的なまでの自信が窺い知れる、そのちんちくりんな体格が妙に大きく見えた。

「で、あたしは何をすればいい？ どうせ件の転校生の事だろう」

見透かした様に玖珠さんは言う。

「見透かしてんじゃないくて、見え透いてんだよ」

……どこかの専門家みたいな感じで釘を刺されてしまった。

閑話休題、実際そうだ。

僕はその「転校生」についてでここに来た。寧ろ「転校生」でも居なければ、自主的にこんな所にまで来やしない。釘を刺されるどころか、螺子を刺された。

「噂はかねがね——って感じかな。アイツ、ユーマーっちゃユーマーなんだよね」

と、玖珠さんは語り始めた。

「箱舟中学って、流石に知ってるよね。事件コトも含めて、色々」と

「え？ まあ、はい」僕は曖昧に頷いた。「知ってはいますが、正直なところあまり……」

「あら、勉強を熱心に励んでこの学校を入学したくらいだから、そこくらい知っていると思っただけね。箱舟中学、簡単に言うところの高校の大元ね」

「大元？」

「大元」

僕の問を玖珠さんは表情一つ変えずに復唱した。

「そう、箱舟中学の生徒はそのまま箱庭学園へと半エスカレーター式に上がって行く。しかし当然、その際のあぶれ者も少なからずいる訳だ——そんな奴らの掃き溜めがここさ。何を間違つたのか、遂には日本有数の進学校までに上り詰めているけれど、大本を辿ればただの分岐点。箱庭学園に成れなかつた末席の末裔だよ」

割れたフラスコとか、よく言うよね——と、玖珠さんは付け加えて、そして自身の椅子へ座り込んだ。

……割れたフラスコ？

「そんな事だから、ここに来る様な学生は事前知識として箱舟・箱庭についてはフツツ識っているはずなんだけれど——あはは、いやはや驚いたね。天然記念物だよ、やつぱり君は素晴らしい」

「ははは……はあ」

乾いた笑いを薄く返しても、玖珠さんは飄々とした態度を崩さない。ふらふらと長いツインテイルを揺らすだけで、何を考えているかまったく分からない。

「で、だ。だからこそこれも識っていて当然だと思うのだけれど——って言うか、そもそも学生なら一度は耳にした事があつても良いと思うのだけれど——」と、大層な前振り

を付けて、仰々しく玖珠さんは口を開いた。「箱舟中学の元生徒会——その話を」

004

贅波生煮は沸切らない娘である。

何をするにも中途半端だと言うのに、やり切る事はなんとなしにやり切つて、それがかつ半端な形に落とし込む。本当に沸切らない娘である。

何に頑張るでもなく、何に熱心になるでもなく、なんの気なしに飄々と生きていたら、遂には高校生になつてしまつていたくらいで、その間のストーリーは、それこそ映画の二・三本シリーズとして続けられるほどの壮大な物ではあつただけれども、沸切らない娘生贄は、それら一切を沸切らないように覚えてはいない。飄々と、全然と、何やら全とと一緒に緋交ぜにしている。

そんな、混沌にも成れない混沌が、世界を救う一端を沸切らない形で背負う事になるのは、自明の理だつたのかも知れないが、それはまた別の話である。

そんな生煮は今、授業のある平日——しかも月曜日だというのに、暇だからと舌に刻まれた漢字を人差し指でぼりぼりと掻きながら、だからだと練り歩いてきた。

当然の如く目標なんて物はない、と言うかそもそも授業があるので暇ではない。眼前をひらひらと飛ぶ蝶をたたつ斬る作業を繰り返していたらこんな所まで来てしまった、と言うのが一番正しいだろう。間違いがあるとすれば、生贄は蝶だと思つていなければならない。

ど、実際のところそれは大きな蛾であったという事だけである。

すると、そんなちやらんぼらんな生煮に声を掛ける者が一人あった。

「ねえ、あんた。こんな時間に何やってんの?」

「剣振り回してちようちよを切り刻もうと思つて」

「こんな時間じゃなくても何やってんの」

ファーストコンタクトは最悪だった。その責任の大半は生贄に有るのだが、しかしそれは今は関係のない話である。

特筆すべきは、話し掛けた人——鳥籠学園の制服に身を包んだ少女。その娘、名を幸子こうしきちこ幸子というが——その制服の一端は赤黒いモノに侵食されていた。

要は、血である。

さすがは贄波生贄、それを一瞬の内に察知し臨戦態勢へと移行した——それは一目だけでは解らない。戦争の専門家であろうと、生贄と数多の死合を重ねなければ、それを察知する事は至難の技であろう。それほどまでに洗練された“臨戦態勢”——を察する事ができなかったのだろうか、幸子はなんともなしに話を続けた。

「授業は?」ボロボロだけど制服着てるし、学生——つて言うか、高校生でしょ?」

「今日のこの時間は確か算数だったかな」

「算数の授業がある高校つてどこだよ」

生贄の的外れな返答に幸子は呆れた様子だった。その呆れた幸子をものともせず、生贄は口を開く。

「んでんで、しつもん」

「……なにかな、ん？」

「(トト)ど(トト)？」

「……」

もはや呆れを通り越して失望の域だった。というか、殴ろうとすらした。

既のところでもなんとか抑えたものの、生贄の、絶妙に人を苛つかせる態度と共に襲い掛かるふざけた言動は留まることはない。

「つつーか、なにその血。血でしょ？ なに、犯罪？ ポリスメン呼ぶ？ んんん？」

くるくると回ったり、手を奇妙な軌道で動かしたり、とにかく人を苛つかせるためだけに生きているのかという風な態度を続ける。

幸子は何も言わない。口をへの字に締める。

なにも、いわない。

「へへへ、ふふふ、ほほほ。なーるほど、まるつときりつと分かっちゃったぜ。二十五パーセントくらい」

そして、生贄は得物を拾う——ただ、そこいらに落ちているような、木の棒を拾う。

いや——しかし、その棒は鋭い。生贄に持たれた瞬間に、それは光すら切り裂く唯一無二の「刀」と化す。

何も斬れない棒——だからこそ、何でも斬れる刀と成る。

だからこそ、沸切らない少女は——

「たぶんおまえ、今回のスピノフのラスボスだろ。悪を成敗して、さつさと最終話にしよう」

沸切らない理由で、悪を断つ——

「——『禍福は狂える繩の如し』」

「ふぎやっ」

事はできずに、今回も煮え切らずに、何もできなかった。

幸子幸子のスキルに、捻じ伏せられた。徹底的に、何が起ころか理解する間も無く、その意識は刈り取られた——後方からいきなり飛んできた野球ボールが、偶然生贄の死角を通り、奇跡的に知覚されない形で、見事に生贄の後頭部にクリーンヒットし、その意識を刈り取った。

「運が良いと、人生つまらないものだよね——って、聞こえてないか」

今回、またもや沸切らない形でこのように踏み台としてそうそう退場してしまった生

贅だけれど、
一つ言える事があるとしたら——まあ、
“だからこそ”である。